

第 1 回滋賀県産業振興審議会における主なポイント

1 ビジョンの中間総括について

(1) 現行のビジョンについて

- ・ 全体的にすべてをよくしようというビジョンに見えた。
- ・ 全体的にグローバルな意識が弱かった印象を感じている。

(2) 5つのイノベーションについて

- ・ 「水・エネルギー・環境」では、(取組が) 進んだ印象を受ける。
- ・ 「医療・健康・福祉」では、京都や大阪と比べると見劣りしている感じがある。
- ・ 「高度モノづくり」では、滋賀だけでアイデアを出したりカタチにするのではなく、京都もうまく活用すれば良いのではないか。
- ・ サポイン(戦略的基盤技術高度化支援事業)という補助金制度は倍率が厳しいが、滋賀は全国でも採択率が高い。個々の事業者の取組に計画段階からハンズオンで支援される体制が機能している。
- ・ 「ふるさと魅力向上」では、「持続可能な農」に若い方々が未来を見据えていただけるようになったと実感している。

2 現状と課題について

- ・ 民間、行政、支援機関等の個々の支援ではなく、それぞれがいかに連携してサポートできるかが課題。
- ・ 中国の深圳やアメリカのシリコンバレー等のスピードに自前主義では追いつかない。産官学含めた提携・連携をはじめとしたビジネスモデルを構築する必要があるのではないかと直近の危機感として持っている。
- ・ 滋賀で取り組んでいる SDGs については、弊社は「水・エネルギー・環境」で取り組んでいる。
- ・ 補助金は中小企業にとってはモノづくりや環境を整えていくうえで必要になってくる。今後整備も必要になるのではないか。
- ・ 第4次産業革命のポイントの記載があるが、常識が覆される時代にモノづくりができるのかどうか、その中で何に取り組む必要があるのか、我々も危機意識を感じている。
- ・ 平成 27 年度のビジョン策定以降、デジタル化が大変なスピードで進展している。最近の流行言葉で「デジタルトランスフォーメーション」(デジタルテクノロジーを駆使したビジネスの変革)がある。新たな価値を生み出す、従来の技術・組織を変革することが、次期滋賀県基本構想基本理念である「変わる」になるのではないか。
- ・ (「デジタルトランスフォーメーション」の) 実現にあたっての大きな課題が、IT 人材の育成・確保である。特に IT 人材は新規採用は容易ではない。そのため自社の既存の人材に新しいスキルを学び直してもらう必要がある。
- ・ イノベーションに関してイスラエルへよく行っていると耳にする。同国ではテクノロジーベンチャーが集積している。シンガポールは国を挙げて戦略特区があり、自国の課題をオープンにし、イノベーションを通じて情報や人材、投資を呼び込む経済政

1 策が一般化している。

- 2 ・ 労働人口の減少と後継者不足についても懸念材料である。現在中小企業の社長の平均年齢は 67、68 歳とされており、12 年たてば 80 代と、男性の平均寿命と同じようになっていく。2030 年には企業数が半減とのレポートもある。産業振興を進めて行く上で、企業を担う方がいなくなるとは元も子もない。
- 6 ・ 教育も必要であり、どのように産業と教育との行政間での連携を行っていくのが大切。
- 8 ・ 近畿レベルで滋賀を見たときに、ものづくりの滋賀、水環境関係の滋賀というのわかる。企業で出る排水に関しては、滋賀はどの地域よりも気を遣い、自然に感謝し、水を処理している特徴がある。
- 11 ・ 地元就職する人口をどう増やしていくかが滋賀の今後の課題ではないか。
- 12 ・ 京都の観光客を滋賀にうまく取り込めていないのではないか。
- 13 ・ 世界から見たら日本は羨ましい国であり、特に滋賀県は地の利、琵琶湖を中心とする観光資源が豊富であり、あまり困っている印象がない。
- 15 ・ 滋賀県は恵まれているからこそ、若い人が憧れる貴重な場所になりうると思っている。憧れは「幸せを続ける」からくると思うので、「変わる滋賀」とあるが変わらなくても良いのではないかと思う。
- 18 ・ 滋賀の魅力は湖。「湖」特化のブランディングをもっとした方が良い。
- 19 ・ スタートアップを生まれさせたいのであれば、中間総括に記載されている補助金を活用した後でどうするのかの視点が足りない。
- 21 ・ 滋賀県の長浜に引っ越してきて、チャレンジしづらさ、その地の先輩方が活躍している中でのやりづらさや、若手は後ろからついてこいというスタイルを感じた。
- 23 ・ 滋賀県で新しい情報が入ってこない、情報が集約されていない、場所もないではスタートアップはやりづらい。
- 25 ・ 今まで滋賀県は企業や大学を誘致してきたが、時代は変わって、次は人材の誘致である。オープンイノベーションの話もあったが、今までの自分たちの考えの枠を捨てて、いかに外部の人材を活用するかという方向に持っていく必要があると強く感じた。
- 28 ・ 目下の最重点課題は全産業の共通課題である「人手不足と高齢化」である。
- 29 ・ これから関西、滋賀で開催される全国的、国際的なイベントを通して、どのように滋賀の魅力を発信し、人を集めていくかについて検討する必要がある。
- 31 ・ IT の高度化によって、小売業も従来のようにただモノを仕入れて販売するだけでは商売として成り立たない。県内の人や企業のつながりをうまく活用して新しいサービスを生み出せるような環境整備についてもさらに進めていただきたい。
- 34 ・ 世界的に「ローカル」がキーワードになっていると感じている。
- 35 ・ 滋賀県＝琵琶湖のイメージである。琵琶湖を中心に産業が生まれてきており、歴史や文化が環境や SDGs がつながっているというストーリーを作れば、世界中の人々に来ていただければ、感動を与えられるのではないか。
- 38 ・ SDGs も、滋賀経済同友会では 17 の目標のうちできるものからやろうと宣言する「SDGs 宣言企業」を行おうと考えている。

3 ビジョン改定の視点

(1) ビジョンが対象とする「産業」の範囲

- ・ 産業は、狭義のものづくり、広義の農業、林業含めた定義がある。モノづくりだけでなく、サービスを含め、トータルで議論していく必要がある。
- ・ 農業、林業が問題で極めて深刻な状態である。産業振興の中に、是非、農業、林業を取り入れてもらいたい。

(2) 計画期間

- ・ 滋賀県基本構想案は2030年までの12年間についての案であるが、12年先はわからないので、時間軸が長いように感じた。
- ・ ビジョンの印象であるが、10年は非常に長いという印象を受けた。2030年を目的・目標と目指すのであれば、中間目標を定量化していく必要があるのではないか。
- ・ 今のビジョンの期間があと5年ということであり、10年間のうち残りの5年を見直すのか、2030年をターゲットとしていくのかを今後議論していく必要がある。

(3) 基本理念および目指す姿

- ・ 定量的な目標で言えば、企業での給料や雇用面において中堅企業の貢献は大きくない。大企業の滋賀での活動における目標、滋賀に本社を置いている企業における目標など、産業ごとに目標を分けて産業を振興していくビジョンにする必要があるのではないか。
- ・ どこまでできるかわからないが、定量的な目標が盛り込めないか。
- ・ 企業経営では必ず数値目標がある一方、県政のビジョンでは目標でなく目的やビジョン、企業で言えば企業理念として捉えた方が分かりやすいのではないか。目的と目標の違いを踏まえた方が良い。

(4) SDGsの視点の活用

- ・ SDGs、Society 5.0の基本的な考え方は「インクルーシブ」という言葉に表現されている。いろんな方がアクセスできる、多様性を認めていくことが背景にある。従来型のビジョンは「一つの目標に向かってみんなで進んでいこう」であったが、SDGs、Society 5.0時代はそうではなくて「共感をみんなで積み上げていく」ものではないかと考える。
- ・ 企業でもオープンイノベーション2.0（社会との共創）が求められ、何が社会課題として求められているかを背景にイノベーションを考えるようになっている。テクノロジー・スタートアップでも生活空間に焦点を当てた新たな取組が増えている。

(5) 2030年までの社会の変化、イベント等の活用

- ・ （2024国スポ・全スポ、2025大阪・関西万博等の）ビッグイベントをどのように活かしながら参画していくのか。

(6) 今後の政策の方向性

- ・ 「水」で困っているところは世界で増えている。滋賀の試みを学びにくるようになれば波及していくのではないか。
- ・ SDGsやCOP25で、水不足が気候変動と同じレベルで注目されている。湖のある滋賀で世界中の水のスタートアップを集めて水に関するビジネスのプロトタイプができれば良いのではないか。
- ・ 滋賀県は長寿の県といわれるが、長寿というだけでなく健康であることが幸せの

1 条件と考えると「健康しが」をどのように産業と結び付けて新しいサービスを提供
2 していくかということについても考えていく必要がある。

3 (7) ビジョンを推進するための方法

4 ア イノベーション創出の方法

- 5 ・ 大企業だけではイノベーションは起きない。大企業に勤めながらも 15 時以降は別
6 の仕事を行う。働き方改革とイノベーションは一体化して考えるべきという議論が
7 出ている。いずれも従来の縦割りから横割りを生み出すことがポイントであり、地
8 域と県を通じて他の地域または諸外国とつながることが大切。
- 9 ・ モニタリングという話があったが、線形に計画を立て PDCA を回すというやり方は
10 非連続の時代では適切ではなく、むしろプロジェクトを実践しながら学んでいく、
11 イノベーションはそうした進め方が求められるのではないかと。

12 イ 人材の育成、多様な働き方

- 13 ・ 次のモノづくりを考えたときに、人材を考えると、自分たちの地域だけでなく近
14 隣地域も活用する必要がある。人材を滋賀に誘致することもありかと考える。
- 15 ・ 若い人の人材育成や高齢者の経験をどう活かしていくのか。
- 16 ・ 女性を働けるようにする。家にいる女性も情報は分かっている。そのような人に
17 応えられる何かを生み出すことが産業的にも大切。
- 18 ・ モノに固執しない、定住しないことが当たり前になってきた若者に、定住しろと
19 いうことは難しい。

20 ウ ビジネスチャンスの拡大、規制緩和

- 21 ・ 地域をどう支えるかと考えると、市民に動ける場所や働く場所を提供していくシ
22 ステムがもっと生まれる必要がある。行政の限界があるところに民間企業や NPO が
23 参入していくことで、新たなビジネスチャンスが生まれる。
- 24 ・ 民間事業者がもっと自由にビジネスができる環境を作ることが行政の役割と思っ
25 ている。規制を緩和していく必要があるのではないかと。

26 27 4 その他

28 (1) ビジョンの周知

- 29 ・ 見直すことも大切であるが、ビジョンの周知を図って多くの県民の行動につなげ
30 ていく。共感のためには県民に腹落ちする内容であることが重要。

31 (2) 事業終了について

- 32 ・ 事業は、続けることだけが美しいのではなく、新しいことも始めるのであれば、
33 美しく終えることも選択肢に入れるべき。

34